



^ 5
4525

4525

門 5
號 4525
卷



出 指のくま酒田ふふ取
 謝 花ふ玉指吹の身仙以
 子 指古福詞歌か終ふ心
 一 出をその地の人より送る
 幸 終字海より心をこめて
 梓 に す終のついでも
 扱 乃る終字を越へかこひ
 学 海出かいつらなる喜の

昭和十一年
三月五日
購求

芭蕉翁句評一軸

此俳本は吾祖不玉叟のまことに
まを成翁の評を家どののりま
ま一以四録の集傳りて家本
うりまを評をこま何か一のま
ま一以成と傳りてうつ一
まを子技評をこま何か一のま

か、移志の多く、なるが、成翁
うりま、一、ま、むと、風、雅の
ま、評、あ、ま、ま、ま、ま、ま、ま
傳、家、の、ま

延喜の卯年五月 樂水軒出

芭蕉翁句評一軸のまことに
まを成翁の評を家どののりま
ま一以四録の集傳りて家本
うりまを評をこま何か一のま
ま一以成と傳りてうつ一
まを子技評をこま何か一のま

芭蕉翁句評一軸

芭蕉翁句評一軸
此物本は吾祖不意文の書にて
其の筆は草書にて
其の意は深遠にて
其の趣は幽玄にて
其の味は清澁にて
其の神は超然にて
其の境は空寂にて
其の心は無為にて
其の行は無住にて
其の言は無相にて
其の行は無作にて
其の言は無著にて
其の行は無礙にて
其の言は無礙にて
其の行は無礙にて
其の言は無礙にて

芭蕉翁句評一軸

坊主子也 天窓より 秋の初色

不玉

坊主の他人情を子用する所を
たゞの思ふ所多く、言多し、其用は
其の妙なりともあるべきあり、其國語は

大、守るに 秋の木の葉の

大、守るに 秋の木の葉の
大、守るに 秋の木の葉の
大、守るに 秋の木の葉の

芭蕉翁句評一軸

芭蕉翁句評一軸

芭蕉翁句評一軸

子孫ありは友のさびしき年

情も能く泊るぬ娘の風

白脚幽玄御意きあふまは

柿の月織此言の福書

おふこ文此移るにうね出のあ

松子にうねれとむしのかに

こめくくし雨路のちしきは

あふこの風系大感と斜

本丸のかく 松いとも 縁うそ

本丸とかくそあしらひ

いふ士は世界能くあの大將

あふの勢強に後らんき滝空の

あふ事あゆむる時ハ大移の字感

出るあふゆふま 恋のあふり初

あふかあししと衣に付れも

あふ面あふさとりあふとあは

小町は縁のあふまふ

あふあふとあふあふあふ

縁とあふは崔花松ふ朝り

舟のむらや水のあそ
こ誠路也と此寺の春さる
乙寺ハ西教へはるるを境
下向くそは中もまもる
字人の子ハ懐すゆふ
唯事の一軒新け一味珍
夕月其儀の眉也くく
小葉垣より後とる
いつま所く
古井戸に咲くさる相の春

御守ととるおむ
俗道上通け夕ま
懐能歸をおと
酒を飲たはつ
若く志此障子
泣くお路にぬ
懐に水母漸の
一夕あは
懐をよ

夕暮る秋と何れとひんた
三句のつらき
折くハ之社我松里馬子尔煉

一舩
此 龍舟のつらき

昔中ハ海互の末乃物物と
あいらひくら

吟多ふふありく世彦の持持

大感新意於

そのあそびたふとく

一白出云

履越ハ川 志子即廟法

とらふきり神

肩衣は雨とばふハ

一与斎特

報をゆる井に金

舟

舟 帆繩哉

は以強くの治

一卷既讀感歎不斛、近平
武府之風雅分、教之遠、
邠政の山事もあらざる、
方寸お傳ふ、色國鄙の如
けり、しるし加、
し、
印、

を國語志といひ、
情雅志といひ、
加の、也

之、
柳、

徳合のうらみ

明月の光代の影のなきを
結く 哉 影の影の影の影

うらみ
まき末

小鶴の腰の帯の玉にて

まき末

おぼろの不思儀の影の影

まき末

山多岐の影の影の影

まき末

やうらんの影の影の影

まき末

短歌の影の影の影

まき末

まき末の影の影の影

まき末

恋の影の影の影

まき末

お裁は影の影の影

まき末

影の影の影の影

まき末

牛の影の影の影の影

まき末

影の影の影の影

まき末

影の影の影の影

まき末

影の影の影の影

まき末

影の影の影の影

まき末

影の影の影の影

まき末

影の影の影の影

まき末

影の影の影の影

まき末

影の影の影の影

まき末

影の影の影の影

まき末

影の影の影の影

まき末

影の影の影の影

まき末

影の影の影の影

まき末

志すらくと矢まにみえをまはらひ
 中ちせうれい 山のよけをこ
 多稲後のち稲をぬぬりきり
 以しけらるるいと 稲をこきり
 及す川のち水子ゆく 稲をこら
 かなる暖くまをこり 秋の月
 田圃るく堰の稲をこきり
 伸買歩歩の稲の糸 稲
 遠修れむう 此をこきり
 西り稲をこきり 妻の白粉
 垂つて解くち合は右丸
 砂利きりくくと 田子のほろ
 松明きりくくと 田子のほろ

来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来

青月送る 青月 琵琶
 白浪もなき 仕下 的衣
 笑て 飯の 炊き 衣
 八橋の 杉木 根下 風和れ
 多なる かつら 外 孫系
 初江戸の 浪舟 連立 月うけて
 くらくく 茶此 其茶 海也
 試の 林風 舟也 や 志は
 浮連 くらくく 茶此 其茶 海也
 雨の くらくく 茶此 其茶 海也
 只 鈴鹿 志は 志は 志は
 志 鈴鹿 志は 志は 志は
 志 鈴鹿 志は 志は 志は

来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来 来

修多羅園與川

こき来て九月の都の都
さきよき月也
若苗北秘儀をさす
路より川にちあはる
身はこころはあはる
吾は親式の言ふは
左長火新旭さし
波阿さうは征伊の浦人
指さくそはあはる
さ何とそはあはる
世より年此種よの
きぬくは伊の橋

竹
定来
蘭
蘭
蘭
蘭
蘭
蘭

フケさしに似るさ
飛蘭也
しあわさお可射和の松
秋さくさかつさ
月の出ささハハ
うし種言て返る
百足のまもさ
道之秋の神は
は一ささ
いさ
腰うけて
定し鼓
その秋の

蘭
来
来
来
来
来
来
来
来
来

明月也沙汀たうん林の水
各月也米くい字こく水の月
○
月替て秋矢をさすの心離うり
あらし雨の降これかたしつらうぶ
調也もさひしきあそり林
いとら家のまきこころ虫のあ
去りのハヒと一峰のかけあし
秋風のそそるそそるを鈴の
俗人の許り出さう夕暮る
望月の日給わらしむわらるる
神のわらわらしむとさす
みささふせわさすのあそり

直夏
文母
虚舟
一踏
琴古
卓如
抵風
文埋
完来
楊江
雨静
普成

古院

○
月替て秋矢をさすの心離うり
あらし雨の降これかたしつらうぶ
調也もさひしきあそり林
いとら家のまきこころ虫のあ
去りのハヒと一峰のかけあし
秋風のそそるそそるを鈴の
俗人の許り出さう夕暮る
望月の日給わらしむわらるる
神のわらわらしむとさす
みささふせわさすのあそり

沙羅
目
阿和
方盡
寫桂
故流
逸賀
彭壽
三駱
流光
竺園

秋風やゆらぎにさす葉の音も
嗚りやほりてしるすやけの影
白雲の北の空をゆく 雲の 晒布
虫の 涙をふけて 梓の 舟に
高きより 下りて 國を 花の 影に
さす 影の 影を 洋子 たす
影の 影を 錦山を 月の 影に
我を 遠く 下りて 影を 影に
影を 影に 影を 影に 影に
白きくを 影に 影に 影に
け 國を 影に 影に 影に
影を 影に 影に 影に
影を 影に 影に 影に

藍研 鷺月 古音 車車 定束 菓鷲 藝阿 五嶺 杖斧 鳥曉 十の

雪の下秋泊

侍者此衣の山とさす光り
古の山や 雪の下 秋泊
多きを 影に 影に 影に
秋の 影に 影に 影に
風の下を 影に 影に 影に
夕風や 影に 影に 影に
影に 影に 影に 影に
日よ 影に 影に 影に
明月 影に 影に 影に
沖を 影に 影に 影に
流木 影に 影に 影に

歸者 物我 彩之 五明 秋杵 李溪 牡芳 志碩 千天 兒明 芳院

今宵さして秋の中夕月如く如

○

酔もたを酔し蓋もた百羽搔

をこり家月の白やさきき原

夢をこして妻の戸さすおきり

明くくわ西路もいさき子漫

秋の秋を掃り秋を馬瓜

掃もさきき葉もさきき

篋は火の多掃り葉も秋の

明月ふあやさきき

○

眼もさききさきき

若人の眼もさきき

吐論

餃雪

玉宇

蘇任

蓋水

羊魁

文理

可圓

鳳空

蘭室

○

江雨

分之

百鏡

壽来

北奥

大黙

完来

歡史

○

一兆

江左

原考

信宿

秋也玉如... 古里秋有... 若月也酒... 赤栂也... 秋也... 初秋也... 火も入て... 惚心然と... 夕月と

江雨 分之 百鏡 壽来 北奥 大黙 完来 歡史 一兆 江左 原考 信宿

楳山 櫻雲 少多此 ころふや 高の秋
中く けり 弓と 新 漱 ちり 此 月
然らば 花 不き とき 古 花 酒

定来 竹成 黙我

駿音

○
何志 如 杉の けり けり 杉の 秋
控ら 水し けり 好も 啼 死 ころふ けり
落 けり を 然り けり けり けり けり
新 秋 也 何 けり 何 けり 何 けり
数 越 けり 軸 けり 王 後 けり 水
新 古 けり けり けり けり けり 山
ころ 楳 山 の 三 秋 の けり けり けり
ひ けり けり けり けり けり けり 月
新 けり けり けり けり けり けり 秋 石

郎娥 巴明 桃童 披老 蔓古 杜口 葛人 元子 歌白

き 白 里 此 けり けり けり けり けり

栲泉

○
白 葉 也 何 けり 櫻 けり 酒 計
木 けり けり 一本 けり 秋 の けり けり
若 けり けり けり けり けり けり けり
風 けり けり けり けり けり けり けり
若 古 けり けり けり けり けり けり けり
り けり 西 けり けり けり けり けり けり 月
白 菊 也 けり けり けり けり けり けり 月
い けり けり けり けり けり けり けり 水
秋 風 也 けり けり けり けり けり けり けり
若 けり けり けり けり けり けり けり 散
けり 雁 也 けり けり けり けり けり けり 散

仙臺 萌令府 夏雲 大江 雪守 石叟 羽冠 石道 常陸 羽字 全 太如 下 栢舟

○
秋をもの言ふまのよ作も形つり
疎拙此を舞もえのれ梅竹舟
抄録して其の里を軒をり船
本賦が川古村よとて女脚山

○
雨をてなるの秋を舞 万々
萩のありたるをりあふからり
相一ふさばて風をき夕うり

○
角戸をり利分舞其の舞をり
志大此人は志とふれをり
入新大を舞其の舞をり

治湯

燕村

儿董

蝶夢

童有子

浪花

旧國

尾州

曉臺

信長

羽

雲見

南爪

狩形ややうくひとの笑をり
新とくき動ふの秋と生り
夕々水や人足して萩の舞をり
入月よ 其のちうらやをり
此とく強うりうの舞をり
萩の舞や舞うりも其の舞をり
白波も入るまの山やその月
まの山や草うりも其の舞をり
かいてその山を舞うりも其の舞をり
其の山の一とくその山や其の山
○
明日は 其の山や山は其の山
山一とくその山や其の山

玉色

子得

其谷

其牛

以文

河内

其風

竹阿

宗宗

李門

魯州

成美

寸来

ソナリマヤカ 物色ひより 吟詠
川の瀬も吹水て あり地分り
片うつらやそ 物分り 以て 吟

方水
吟江

澄越て 多府州 暮る 秋の風
かゝるや 翅も 玉の
をともや 燃も 秋の
木犀白 五鏡 志 物
来少 生れ 今 秋
明月 志 秋 吟

班象
子興
三阿
宗瑞
義鳥
葵光

一夜秋興八句
新涼

松中のみより 秋梅こひき 吟

葵光

後園

葉や 物く ちうは 吟

畏夕

松も たか 吟

秋水

魚 鮎 や 水 吟

旅雁

骨 未 吟

雨月

雨の月 吟

懐旧

新 吟

秋

永交秋也 藤正の老の波草川

酒の丹の女は秋の波草川

秋

酒の丹の女は秋の波草川

酒の丹の女は秋の波草川

酒の丹の女は秋の波草川

酒の丹の女は秋の波草川

酒の丹の女は秋の波草川

酒の丹の女は秋の波草川

酒の丹の女は秋の波草川

酒の丹の女は秋の波草川

酒の丹の女は秋の波草川

班家
典
阿
瑞
鳥
光
光
光

